

# 運動と感覚

科目責任者 神 作 憲 司  
学年・学期 2 学年・2 学期

一  
学  
年

## I. 前 文

我々の体は、絶えず変化する外界の条件に適応するために、外界の情報を的確に把握する必要がある。外界からの刺激はまず、分化した感覚細胞で受容され、そこで電気信号に変換され、神経のインパルスとして中枢へ伝達される。中枢内で入力情報の処理が行われ感覚、知覚、認知などの働きが起こる。本科目では、まず、中枢におけるこの働きについて、その生理学的な仕組みを学習する。我々はまた、処理された情報に基づいて運動・動作・狭義の行動などの出力を制御し、外界の変化に対して反応、適応してゆく。運動は脊髄、脳幹、大脳基底核、大脳皮質、小脳などのはたらきによって、反射性、神経性の制御を受けている。この運動制御の仕組みについても学習を進めたい。

本科目を履修することにより、医学生理学における情報伝達に関する知識が得られ、信頼される医師として活躍できる能力の基礎が身につく。また課題に対しては、試験について採点を行うなどしてフィードバックする。

## II. 担当教員

教 授	神 作 憲 司	生理学
教 授	町 田 繁 樹	獨協医科大学埼玉医療センター眼科
教 授	宇 賀 貴 紀	山梨大学
特任教授	河 野 憲 二	生理学
准 教 授	小 金 丸 聡 子	生理学
講 師	加 藤 永 子	生理学
助 教	福 島 央 之	生理学
助 教	高 橋 俊 光	生理学
助 教	藤 木 聡 一 朗	生理学

## III. 一般学習目標

急速に伸展しつつある神経生理学を理解するための基礎的知識を習得する。既に2年次1学期に履修した「情報伝達」で得た知識の上に乗って、2年次3学期に本科目の終了後に履修する「高次脳機能」での学習内容とを有機的に結びつけることによって、神経系の機能の理解を深める。また、神経筋疾患との関連を念頭に置きつつ学習を進め、病態生理学的な思考能力を養う。

## IV. 学修の到達目標

講義は、医学教育モデル・コア・カリキュラム——教育内容ガイドライン——に示されている到達目標に則して行われるが、より具体的な行動目標を以下に記す。

### 1. 運動機能の生理学

#### A 運動の反射性制御

- (1) 脊髄反射の神経機構を学び、神経回路網の基本的働きを説明できる。
- (2) 脊髄動物、除脳動物、中脳動物が示す特徴ある姿勢や反射から、脳幹の役割について説明できる。

#### B 運動の神経性制御

- (1) 小脳の機能をその構造と関連させて説明できる。
- (2) 異常運動から大脳基底核の働きについて説明できる。

### 2. 感覚機能の生理学

#### A 体性感覚について、皮膚感覚および深部感覚の受容機序と情報処理機構を説明できる。

#### B 味覚・嗅覚について、化学物質に対する感覚情報処理機構を説明できる。

C 聴覚情報処理について、その機械的機構と神経機構を説明できる。

D 視覚情報処理について、解剖学的・生化学的事実とも関連させてその機構を説明できる。

## V. 授業計画及び方法

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者
1	8	26	水	4	感覚総論	神 作 憲 司
2	9	9	水	3	体性感覚-1 (皮膚感覚)	福 島 央 之
3		15	火	3	体性感覚-2 (深部感覚/内臓感覚)	福 島 央 之
4		15	火	4	体性感覚-3 (痛みとその調節)	福 島 央 之
5		15	火	5	網膜の受容機構	加 藤 永 子
6		17	木	3	視覚の情報処理-1 (ベーシック)	神 作 憲 司
7		17	木	4	視覚の情報処理-2 (アドバンス)	宇 賀 貴 紀
8		17	木	5	網膜電図とその臨床応用	町 田 繁 樹
9		24	木	1	平衡感覚の受容機構	加 藤 永 子
10		24	木	2	聴覚の受容機構	加 藤 永 子
11		25	金	4	聴覚の情報処理	神 作 憲 司
12		25	金	5	味覚と嗅覚の受容機構と情報処理	小 金 丸 聡 子
13		29	火	4	運動単位	小 金 丸 聡 子
14		29	火	5	脊髄の機能-1	藤 木 聡一朗
15	10	2	金	4	脊髄の機能-2	藤 木 聡一朗
16		2	金	5	脳幹の機能-1	高 橋 俊 光
17		2	金	6	脳幹の機能-2	高 橋 俊 光
18		7	水	2	大脳基底核の機能	河 野 憲 二
19		7	水	3	小脳の機能	河 野 憲 二

## VI. 評価基準 (成績評価の方法・基準)

定期試験、講義中に行う小テスト、随時課すレポート、出席状況などを参考にして総合的に評価する。

## VII. 教科書・参考図書・AV資料

- ① 本間研一ら著 標準生理学 第9版 医学書院 2019
- ② 大地陸男著 生理学テキスト 第8版 文光堂 2017
- ③ 杉晴夫ら著 人体機能生理学 第5版 南江堂 2009
- ④ 藤井聡ら著 コアカリ生理学 医学評論社 2008

- ⑤ 小幡邦彦ら著 新生理学 第4版 文光堂 2003
- ⑥ 森 寿ら編 脳神経科学イラストレイテッド 第2版 羊土社 2006
- ⑦ A.C.Guytonら著 (河野憲二ら総監訳) ガイトン生理学 原著13版 Elsevier 2018
- ⑧ 植村慶一監訳 オックスフォード・生理学 原著3版 丸善 2009
- ⑨ 鯉淵典之監訳 症例問題から学ぶ生理学 原著3版 丸善 2009
- ⑩ E.R.Kandelら著 Principles of Neural Science 5th ed. McGraw-Hill 2012

#### VIII. 質問への対応方法

- ① 基本的には随時受け付けます。
- ② 臨床の先生や学外からの先生など連絡の取りづらい先生への質問に関しては、科目責任者に、e-mailで申し出てください。e-mailには、詳しい質問内容と質問する相手の先生の名前を明記してください。回答はe-mailの返信で行います。あるいは、相手の先生との面会の日時を連絡します。  
メールアドレス：dokkyo-physiol2@dokkyomed.ac.jp

## IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

\*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能，種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い，他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療，予防について原理や特徴を含めて理解し，他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け，正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け，患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け，患者やその家族，あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料，情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し，自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち，専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち，実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し，自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け，自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	

## X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

事後課題については，後日模範解答を掲示し，返却します。

## XI. 求められる事前学習，事後学習

シラバス別冊に記載。なお，シラバス別冊に記載が無い場合，要点を確認しておくこと。（所要時間の目安20分）

## XII. コアカリ記号・番号

シラバス別冊に記載。なお，シラバス別冊に記載が無い場合，要点を確認しておくこと。（所要時間の目安20分）